

藤井：前川先生にお訪ねしたい。文献学的にはプロトセム系集団がもともと西アジアにいたと考えられるのか？

前川：西アジアということであればその可能性はある。

藤井：アフリカからやってきたというのは？

前川：セム系のアフリカ出自を想定する人もいるし、可能性はある。

西秋：アフリカにも円筒墓とシスト墓はあるのか。

藤井：網羅的に調べたわけではないが、リビア、エジプトにはちらほらとみられる。

前川：プロト・セム語の起源か？

石田（英）：文字ではそれを判断するのは困難ですか？

前川：2500BCが限度。文字資料がそもそも存在しない時代なので。キシユなどの伝承から前3千年までは判断できる。

藤井：セム系集団のメソポタミア、シュメール世界への進出は断定できるか？

前川：そう考えてよいと思う。前3千年紀後半にはすでにシュメール語よりアッカド語のほうが優勢になっていたようだ。前2千年紀にはシュメール語は死語化してしまう。

西秋：墓は年代をおうごとに拡散していくのか。

藤井：円筒墓に関しては、シナイ半島のものが最も古く、東に行くほど新しくなる。シスト墓はわからない。

小泉：シスト墓と円筒墓では拡散の速度が異なるのか。

藤井：円筒墓のほうが遅い。エミレーツにまで達するのに前3千年紀後半にまでかかる。シスト墓と、とりわけ円筒墓は縁辺部を通過して分布（拡散）していく。

小泉：移動手段はどういったものが想定できるのか。まだラクダはない。ロバ？人ももちろん移動した？

西秋：西からセム語を話す人がやってきて、東の人が吸収されたというが、東にもともといた人はどうなったのか。どのような理由でセム語を話す人間集団が優勢になっていったのか。ある言語を話す人のほうが人口増加率が高かったということ？

藤井：事実、セム語を話す人々が優勢であったということしかいえない。メソポタミアの文書にセム系の人が出てくる段階であつた墓制が広がるのは確か。墓制があらゆる文化事象の中で最も保守的なもので系統をあらわすとすれば、何らかの関係があると考えてよいのでは

石田（恵）：遊牧民が一方に動いているのは、ある方向性を持って動いているのか。動いた先から戻ってきて、墓を形成したということは考えられないのか。

藤井：ならしていけばシナイ半島が古いということ。移動に関しては、そういうわけではないと思う。また、墓の形成に関しては、そういう場合もありうるだろう。ところで、前後の時期では適用されているにもかかわらず、なぜこの時期に関しては集団の移動という議論が避けられるのであろうか。

西秋：この時代には、移動先とされる地域にすでに居住している人間集団がいるからだろう。

前川：アムル語は、どちらかといえば田舎のアッカド語（方言）で、セム語のなかのアッカド語とはちがう。そもそもアッカド語自体がセム語系言語のなかでも異色の存在で、動詞体系にもシュメール語の影響が認められる。エブラ語は北西シリア語というよりは、東のアッカド方言的。アッカド語の流入とアムル語が流入する時期を混同すべきではない。ウルク・エクспанションというかたちでのアッカド語流入伝播の説明はじつに都合がいい。

藤井：私もそのことを承知しているが、そうすればますます、「セム系」の動きを墓制が表していると考えられないか。

前川：ウルク・エクспанションの状況を適用するならば、「セム系」の流入は前4千年紀以降になるため、都合がいい。

常木：言語年代学（どちらの言語が古いのかなどという議論）というのはどの程度行われているのか。

前川：あまり多くは行われていないと思う。ただし、比較セム語の議論はある。しかしながら、言語的祖先の話は語られない。

西秋：なぜ「セム系」がそんなに拡散できるほど優勢であったのか。

藤井：ある意味もともとあまり人がいないところに入ってきているし、前4千年紀半ばに遊牧を行う「セム系」人間集団が爆発的に増加したといえる。そう考えるとこの現象はウルク・エクспанションの時期と重なるし、状況も似ているかも。

石田（英）：アフリカの環境は不安定である。今回問題となっている「セム系」の移動以前に人間集団の移動は起こっていた。アフリカ側の環境的な要因も考慮に入れるべきであろう。

常木：「セム系」ではない言語に関しては何系かわかるのか。

藤井：地名などにしか残っていないためわからないと思う。

常木：出自がわからない言語というのはたとえば新石器時代などにもあっただろう。

前川：そうだ。でも、プロトを探し出すときりがない。